

## 名声の歪んだ関係

—文学的アクチュアリティの分布とそのシステム論的考察：  
『ドイツ出版図書目録（VLB）』のデータをもとに—

名 執 基 樹

### 0. はじめに

逆べき型の分布という現象がある。順位順に頻度を調べてゆくと、一位の順位のものには極端に頻度が高く、二位、三位になると頻度が一気に下がる。しかし、すぐに頻度の差は縮まりだす。順位の中ごろでは差はさらに小さくなり、やがて同位のものに並びだす。そして、最下位に近づくと同位に並ぶものの数が多くなる。グラフにすると指数関数状の美しいスロープを描く。その形から逆J型の分布と言われることもある。

経済学の領域では所得をめぐるいわゆるパレート分布が有名である。計量書誌学の領域では、テキスト内の単語の使用頻度、論文の引用数や図書の貸し出し数の分布など、多くの領域でこの種の分布が見出されている。最初の発見者にちなんでZipf型の分布と呼ばれたりもする。いくつかの関数式が個々の現象に関して提案され、発見者にちなんだ法則名がつけられているが、本質的には同じ現象と考えられており、一つのモデルから全ての法則を説明しようとする試みもなされている。全てを一まとめにして計量書誌学（ビブリオメトリクス）の法則などとも言われている<sup>1)</sup>。

文学に関しては作家の名声について調査したものがある。C. Martindaleは1995年の論文“Fame more fickle than fortune: On the distribution of literary eminence”の中で、英文学、フランス文学の研究論文数を作家ごとに調べ、作家の名声の分布がこの逆べき型の分布に当てはまることを示している<sup>2)</sup>。このことは、名声というものの本質について、ある重大な事実を示唆している。つまり、作家の名声とは才能やその作家の作品の価値そのものの（少なくとも直接的な）反映ではないのである。純粋な文学的価値だけの要因で、そのような、数学的に美しい(!)分布に評価の差異が構造化される筈はない。他の何らかの社会的メカニズムがそこに働いている——そしてそれが本来の差異を指数関数状の分布にあらわれるような極端な歪みへと変換させている——と考える方が自然だからである。

もっとも、Martindaleの調査に関しては反論もできる。そもそもそれは文学についての調査ではなのではないか。文学の研究についての調査、研究論文の蓄積に関する調査でしかないのではないのか、と。それに対しては、文学研究には作家のカノン化のプロセスの最後の段階として

の側面もある<sup>3)</sup>、という指摘で十分反論はできるのだが、しかし、それでもそれ以前のプロセス、つまり、作品が書かれ、出版され、読まれるという文学の現場の生のプロセスについては、この論文数の分布の調査からは十分な考察ができないのも事実である。

そこで、ここではその生の文学のプロセスに、つまり、名声形成の初期段階に当たる、文学的アクチュアリティ——ここでは話題性という意味ではなく、ある時点で文学シーンに肯定的に受け入れられているという幅広い意味でこのアクチュアリティの言葉を使ってゆきたいのだが——が形成される文学出版の現場の構造に焦点を当てることにした。具体的には、実際の文学作品の出版データ（『ドイツ出版図書目録 (VLB)』のデータ）を対象に分布を確かめることにした。

この調査は一つの理論的な狙いも持っている。名声を関係性（差異）として解釈する理論的立場（ブルデュール）の批判的再検討という狙いである。

実際、調査の結果は Martindale (1995) とほとんど同じものになった。名声とはやはり何らかの形で、言わば機械的に歪められたものだったのである。したがって、文学シーンを構造＝関係性（差異）の観点から捉える視点を一段階深化させ、その背後にあるメカニズムへ目を向ける必要性が見えてくる。調査結果の報告と合わせて、ここでは、構造的アプローチからシステム論的アプローチへの観点拡大という視野拡大の方向性を提案してみたい。

## 1. 調査の観点と方法：『ドイツ出版図書目録 (VLB)』を使った出版点数の調査

さて、Martindale の調査では論文数が調査の対象となった。しかし、論文の対象となる以前の生の文学活動を調査しようとする、手がかりとなる筈の出版部数や出版点数といったデータが容易に入手できないことが障害となる。論文と違い、出版データは一部の著名作家を除いて、系統だって整理されてはおらず、出版部数などもベストセラーの上位の作品ぐらいしか公表されていない。文学シーンの構造を調べるとなると、さほど著名でない作家や大衆文学的な作家など、あらゆる作家のデータが含まれていなければならない、そうした一部のデータでは不十分なものは明らかである。

そこで注目したのが出版タイトル数（点数）である。具体的には、『ドイツの出版図書目録 (VLB: Verzeichnis lieferbarer Bücher 1996 CD-ROM (stand: Sept.))』を利用した。これは1996年9月の時点でのドイツ語圏における入手可能な図書の電子化された目録である。これを利用して、作家ごとの入手可能なタイトル数を調べることで、作家の文学的アクチュアリティの分布を調べようと考えたのである。

観点はこうである。一般に文学というコミュニケーションは、通常、作り手と受け手が異なる時間、異なる空間でそれぞれの立場から参加しあうコミュニケーションである。日常会話とは違い、同一の時空にない文学コミュニケーションでは、コミュニケーションの送り手と受け手とは社会的期待という抽象的なチャンネルを介して出会うしかない。つまり、読者の側に、どうい

作品が読みたいか、選択を可能にする期待が存在し、出版する側にも、どういう作品が（どう）読まれるかという期待が存在し、その相互の探りあい、噛み合いの中でコミュニケーションが成立するのである。その際、作家（の名前）はジャンルなどとともに、そうしたコミュニケーションを調整する社会的期待としての役割を果たしていると考えられる。フーコーが「機能的な作家」と呼んだ作家の側面である<sup>4)</sup>。つまり、われわれは作家を基準に文学を<選ぶ>のである。作家の作品世界を期待し、その期待をもとにコミュニケーションを選択しているのである。しかも、単に選ぶだけではない。期待が確かなら、選び続けることになる。つまり、同じ作家の別の作品にも手を伸ばすことになる。そして、出版社の方も、読者の反応がそのように良好であるなら、新たに作品集を編集しなおしたり、文庫版を出版したり、古い版の改訂版を出版したりするようになる。こうして、作家というチャンネルをめぐり、作り手、受け手の双方から期待が膨らむ。その期待が膨らめば膨らむほど、同時期に文学シーンに出回る作家の作品のタイトル数は増えることになる。したがって、作家のタイトルの数の差とは、こうした期待の度合い——文学的アクチュアリティ——を反映していると考えられるのである。

以上のような考察から、入手可能なタイトル数は主に作家というコミュニケーション・チャンネルのその時点での安定度、期待度を反映したもの（＝文学的アクチュアリティの指標）と解釈し、出版点数に注目することによって、文学シーンの現場での作家の初期的な名声の分布を調べることとしたのである。

しかし、出版点数を調べると言っても、VLBには全体で69万件を超える図書が記載されている。しかも、必ずしも全ての図書にジャンルの区分（“Sachgruppe”）が記載されているわけではない。また、文芸作品（“Belletristik”）に区分されていても、そこには時代も国も違うものも含まれている。

そこで、今回の調査は、次のように対象を絞り込むことにした。

作家はドイツ語圏の現代の作家（＝VLB記載時の1996年に活躍中の作家）とした。同じ文学シーンに属していることが前提だからである。手がかりとしたのは『キュルシュナー・ドイツ文学年鑑1998（Kürschners Deutsches Literatur-Kalender 1998）』（以下、KDLKと略）である。これには文学作品および文学に関係する著書を著した一万五千人にも上る作家が、文学的評価に関係なく網羅的に記載されており、シーンの全体像を探るのに適している。しかし、それだけの数の作者について出版データを確認するのは極めて困難である。そこで、KDLKの巻末の居住地別一覧をもとにサンプルを絞り込むことにした。居住地一覧によると、記載の多い都市は、上位からベルリン860名、ミュンヘン441名、ハンブルク310名となる。ただ、ベルリンは東西統合後という特殊事情を持っているため、ベルリンを省き、2位と3位のミュンヘンとハンブルクに関して調査を行うことにした。また、二つの都市の作家を対象としたのは、ミュンヘンだけでなく、ハンブルクにおいても同様の結果がでるか、確認するためである。

しかし、このKDLKには文学関連の研究者や芸術家、そして児童文学の作家なども含まれている。また、同じ作家の作品でも文学作品だけでなくエッセイや時事評論などさまざまなジャン

ルの図書が混ざって来る。アンソロジーに加えられているだけの場合もある。この調査の狙いは個々の作家の文学作品への期待度の分布の分析である。この観点から、対象は児童文学を除く通常の文学作品のみとし、共著やアンソロジーなどは含めず、そのかわり、同じ文学作品が文庫化や全集化、改訂版などとして出版される場合にはそれぞれ冊数に加えてゆくこととした。作業としては、まず、KDLKのミュンヘン、ハンブルクの作家についてVLBで検索し、図書の記載がある作家についてはジャンルを確認した。そして、ジャンルや出版形態が不明なものについてはドイツ国立国会図書館（フランクフルト、ライプツィヒ）を初めとする幾つかのホームページを検索し、文学作品かどうかを確認した<sup>5)</sup>。最終的には、ミュンヘンで192名、867点のタイトル、ハンブルクで145名、540点のタイトルが有効なデータとして残った。これについて分布の調査と回帰分析による法則性の検証を行ったのである。

## 2. 調査の結果：ミュンヘンの作家とハンブルクの作家に見る出版タイトル数の分布

では、調査の結果について説明してゆきたい。

### ① ミュンヘンの作家の場合

表1は同時代のミュンヘンの作家192名のそれぞれの作家の文学作品の入手可能タイトル数（出版点数）を表したランク順の表である。人気恋愛小説家のUtta Danella（69点）を筆頭に、独自の幻想的世界を描いて話題となったHerbert Rosendorfer（49点）、劇作家のTankred Dorst（33点）、すでに大家と言えるLuise Rinser（29点）と続き、7番目にはバイエルン地方の方言を取り入れた地域文学の作家Alfons Schweiggertなども登場する。2004年のノーベル文学賞受賞者のElfriede Jelinekはこの時14タイトルでリストの12番目に入っている（Jelinekはウィーンのほかにミュンヘンにも住所を持っている）。かと思えば、主にHeftromanとして出版されているSFのペリー・ローダン・シリーズの作者の一人J.W.R.Kneifel（9点）も19番目に入っている。映画監督でもあり、日本で翻訳されている小説もあるDoris Dörrie（10点）は17番目である。ハイカルチャーとしての文化的正統性の高いものから、娯楽小説や地域文学に至るまで、様々な作家が入り込み、多彩な顔ぶれになっている。しかし、このデータをもとに作家をタイトル数が多いものから降順に並べ、タイトル数の分布を調べて見ると、やはり、そこには見事な逆べき型の分布が現れてくる。図1はその分布をグラフで表したものである。法則性を予感させる分布になっているのが分る。

法則性についてはMartindale（1995）との比較の意味から、Martindaleが用いた二つの計量書誌学のモデルを当てはめて検証することにした。

扱った二つの法則をここで紹介しておこう。なお、いずれの式においても、Fは頻度（タイトル数）、Rはランク（順位）を表す変数、a, b, c, および、A, B, Cは定数を表している。

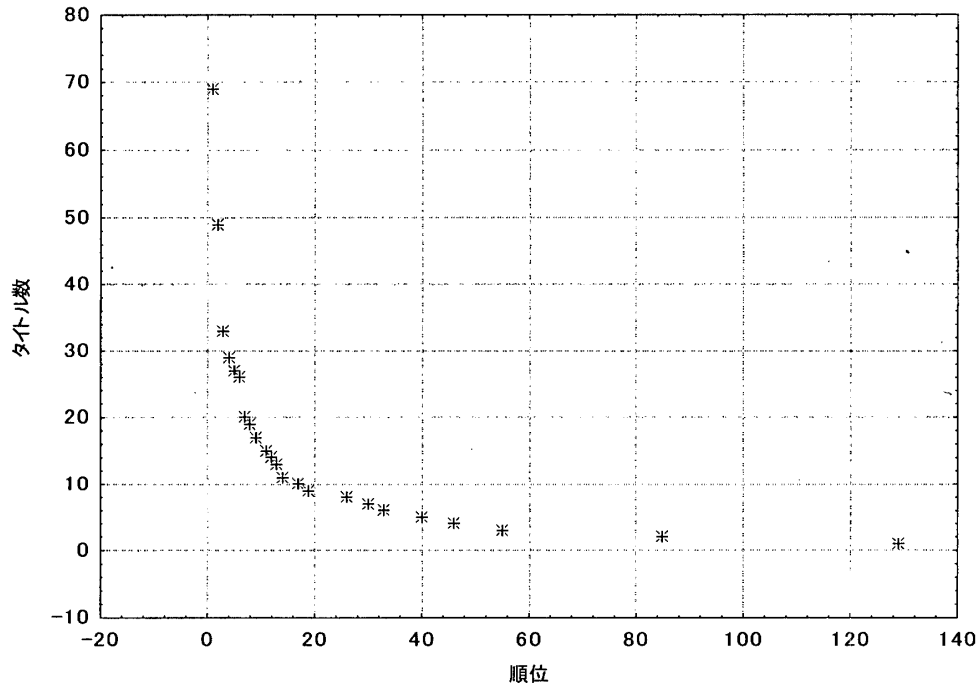
まず、最も一般的なZipfの法則<sup>6)</sup>は次のような式に表される。

名声の歪んだ関係 — 文学的アクチュアリティの分布とそのシステム論的考察：『ドイツ出版図書目録 (VLB)』のデータをもとに—

表 1 : ミュンヘンの作家のVLB (1996年) 記載タイトル数 (上位順)

順位	点数	作家	順位	点数	作家	順位	点数	作家
1	69	Danella,Utta				129	1	Aberle,Andreas
2	49	Rosendorfer,H.					1	Bähr,Helmut
3	33	Dorst,Tankred					1	Baumer,Franz
4	29	Rinser,Luise					1	Bergauer,Conrad
5	27	Zöpfl,Helmut					1	Bleisch,Ernst Gunther
6	26	Krüger,Michael					1	Boette,Monika
7	20	Schweigert,Alfons					1	Braun,Alois C.
8	19	Piontek,Heinz					1	Brügger,Margret
9	17	Riebe,Brigitte					1	Bull,Bruno Horst
	17	Westphalen,J. von					1	Corleis-Wittner,Gisela
11	15	Reinig,Christa					1	Dahlke,Rüdiger
12	14	Jelinek,Elfriede					1	Eppelsheimer,Rudolf
13	13	Fischach-Fabel,R.					1	Gosewitz,Ludwia
14	11	Herburger,Günter					1	Grote,Wilfried
	11	Hildebrandt,Dieter					1	Gutzschhahn,Uwe-Michael
	11	Waberer,Keto von					1	Halban,George Ritter von
17	10	Bieler,Manfred					1	Hirth,Matthias
	10	Dörrie,Doris					1	Hölle,Margret
19	9	Baur,Wolfgang					1	Höricht,Johannes Maria
	9	Grimminger,B.					1	Horkel,Wilhelm
	9	Kinkel,Tanja	85	2	Ahlsten,Leopold		1	Hummel,Karl-Heinz
	9	Kneifel,J.W.R.		12	Bachem,Bele		1	Kaiser,Susanne
	9	Köpf,Gerhard		2	Bachér,Peter		1	Kalkschmidt,Beate
	9	Leeb,Helga		2	Barwasser,Karlheinz		1	Konjetzky,Klaus
	9	Pauderer,Monika		2	Bauer,Hermann		1	Kuby,Erich
26	8	Amery,Carl		2	Becker,Peter von		1	Latzel,Sigbert
	8	Augustin,Ernst		2	Belwe,Andreas		1	Leonhardt,Henrike
	8	Bronnen,Barbara		2	Bergmüller,Christian		1	Loew,Gerhard
	8	Goetz,Rainald (M.)		2	Blumenberg,Bettina		1	Maier,Hans
30	7	Bächler,Wolfgang		2	Dahl,Edwin Wolfram		1	Meyer-Clason,Curt
	7	Hüther,Julius E.		2	Dietl,Erhard		1	Münscher,Alice
	7	Makowsky,Jutta		2	Dietrich,Wolfgang		1	Muenzer,Paul
33	6	Fischach,Hans		2	Dosch,Markus		1	Norden,Peter
	6	Nick,Dagmar		2	Draesner,Ulrike		1	Ost,Heinrich
	6	Politycki,Matthias		2	Gille,Hans Werner		1	Ostermaier,Albert
	6	Scheib,Asta Agnes		2	Häusler,Gerhard		1	Pettinger,Franz
	6	Schinzl,Gisela		2	Haas,Ursula		1	Poser,Caspar von
	6	Schünemann,Peter		2	Hacke,Axel		1	Riederer,Hartmut
	6	Widmayer,Frank		2	Herbst,Hans		1	Rosenfelder,Myrianne
40	5	Hohoff,Curt		2	Holzheimer,Gerd		1	Sailer,Anton
	5	Naegle,Robert		2	Hopf,Andreas		1	Samper,Rudolf
	5	Pfaff,Wolfgang		2	Hültner,Robert		1	Schlüter,Herbert
	5	Said		2	Jelen,Maria		1	Schmidbauer,Wolfgang
	5	Schreiber,Hermann		2	Kassajep,Margaret		1	Schmidt,Eckhart
	5	Stuhlmann,Helmut		2	Katz,Anne Rose		1	Schmitz,Fred
46	4	Angstmann,Augustin		2	Kayser,Barbara		1	Sonner,Franz-Maria
	4	Deinert,Wilhelm		2	Klinge,Günther		1	Sperr,Martin
	4	Fromm,Christoph		2	Kotulla,Annemarie		1	Sréter,Wolfgang
	4	Goepfert,Günter		2	Kühnert-Schostack,R.		1	Stackelberg-Treutlein,F von
	4	Kluge,Alexander		2	Lattmann,Dieter		1	Steinke,Udo
	4	Neumeister,Andreas		2	Lieckfeld,Claus-Peter		1	Stephani,Claus
	4	Pfeiffer,Gisela		2	Mally,Anita		1	Szymanski,Achim
	4	Röckel,Susanne		2	Müller-Bernhardt,Jürgen		1	Taubenberger,Hermann
	4	Voswinkel,Klaus		2	Oswald,Georg M.		1	Till,Marietta
55	3	Albus,Anita		2	Pakleppa,Fabienne		1	Tillich,Ulrike
	3	Ani,Friedrich		2	Praun,Hella		1	Torossi-Brinkmann,Eleni
	3	Biller,Maxim		2	Ruckdäschel,Erika		1	Troppmann,Artur
	3	Brun,Georg		2	Rudorf,Günter		1	Trotha,Hela Margarethe von
	3	Francia,Luisa		2	Ruge,Helmut		1	Wackwitz,Stephan
	3	Günther,Karl Heinz		2	Schröder,Mathias		1	Walbrecker,Dirk
	3	Gulden,Alfred		2	Seuren,Günther		1	Waneck,Gabriele
	3	Hammerstein,Lukas		2	Simon,Klaus		1	Wimmer,Karl
	3	Harbeck,Alois		2	Volk,Maria		1	Yurtdas,Barbara
	3	Jacobi,Peter		2	Zimnik,Reiner		1	Zängl,Wolfgang

図1 ミュンヘンの作家



$$1-1 \quad F = a / R^b$$

両辺について対数を取ると、次の1-2のように  $\log F$ ,  $\log R$  を変数とした直線を表す式に変形できる。これは定数を整理すると1-3のようになる。

$$1-2 \quad \log F = \log a - b \cdot \log R$$

$$1-3 \quad \log F = A - B \cdot \log R$$

Zipfの法則にさらに項を付け加え、若干複雑化した形になっているのが、次のYuleの法則である。Martindale (1995) では、両者とも極めて分布によく当てはまるが、比較してみると、Yuleの法則の方がより良く当てはまることが報告されている。

$$2-1 \quad F = a / R^b \cdot c^R$$

これも同じように両辺で対数を取ると、次の2-2ようになり、さらに変数と定数を置き換えて整理すると、2-3になる。

$$2-2 \quad \log F = \log a - b \cdot \log R + R \cdot \log c$$

$$2-3 \quad \log F = A - B \cdot \log R + C \cdot \exp(\log R)$$

これらはランク（順位）×サイズ（頻度）関係についての法則として有名になったものであるが、ここではさらに順位のかわりに累積人数を取った場合も扱うことにした。そもそも順位とは上位からの累積人数と原理的に対応したものである。ほぼ同じ内容を持つと言えるが、理論的な観点からは累積人数の方が解釈しやすい。順位という分布のもつ含意は分りにくい、累積人数と捉えると、中心となる作家のグループの規模のことだとイメージできるからである。つまり、タイトル数何冊以上の作家の集団という風に中心となる作家たちを捉え、タイトル数を減らすごとにその作家の集団の枠を次第に広げてゆくとイメージしてゆけるのである。したがって、実はランク×サイズ関係に現れているのは、中心から周縁に向かって作家のグループを広げると連動して起こるそれらの作家の最低タイトル数の水準の変動、言わば、中心範囲×注目度関係のことと言える。さらに、累積人数を扱った方が最終的な全体の人数を分析に含めさせることができるため、データの持つ情報量という点でも優れている。

また、分析には全作家の分布データではなくランクあたりの分布データを用いた。ここで問題となるのはランク×サイズ関係が示す法則性であって、全作家の分布傾向ではないからである<sup>7)</sup>。したがって、具体的に言うと、最終的にはケース数23個の順位×タイトル関係が分析の対象となった。

回帰分析にかけ、それぞれの数式に当てはめた結果は、次のようになった。

まず、Zipfの法則（1-3）に当てはめた場合であるが、その場合には分布は以下の数式でモデル化できることが分った。

$$1-4 \quad \log F = 4.591 - 0.836 \cdot \log R$$

F検定での結果は $F(1,21)=649.293$ 、 $P<0.0001$ であり、明らかにこの係数が有意であることが分った。また、決定係数は $R^2=0.967$ 、調整済決定係数は $R^{*2}=0.967$ となった。これは、それぞれ分布の約97%がこの数式で表現されうることを意味している。極めて高い数値だと言える。

順位のかわりに累積人数を扱った場合には、次のようになった。なお、累積人数を表す変数についてはRのかわりにSを用いることにする。

$$1-5 \quad \log F = 4.497 - 0.769 \cdot \log S$$

こちらでも、 $F(1,21)=1060.556$ 、 $P<0.0001$ となり極めて有意であり、決定係数・調整済決定

係数については  $R^2=0.981$ ,  $R^{*2}=0.980$  となり, 1-4 よりもさらに若干良い値が出た。

次に Yule の法則 (2-3) を当てはめた場合であるが, モデルは次のようなものになった。

$$2-4 \quad \log F = 4.301 - 0.629 \cdot \log R - 0.010 \cdot \exp(\log R)$$

$F(2,20)=2434.559$ ,  $P<0.0001$  と極めて有意であり, 決定係数・調整済決定係数については  $R^2=0.996$ ,  $R^{*2}=0.996$  となった。数値としては, Zipf の法則によるモデルの場合よりも高い説明力を示す値である。

累積人数を取った場合には, 次のようなモデルになった。

$$2-5 \quad \log F = 4.286 - 0.633 \cdot \log S - 0.005 \cdot \exp(\log S)$$

$F(2,20)=2826.354$ ,  $P<0.0001$  と極めて有意で,  $R^2=0.996$ ,  $R^{*2}=0.996$  と, これも 2-4 の場合と同等の高い値を示した。

以上から, Martindale (1995) の場合と同じように, Zipf の法則も Yule の法則もモデルとしては極めて良く当てはまることが確認できた。では, Yule の法則がより分布に当てはまるという点も同じだろうか。数値の上では,  $R^2$ ,  $R^{*2}$  の値は Yule の法則によるモデルの方が幾分優れた値になっていたが, これは意味のある差なのだろうか。

まず, グラフを見てみよう。

図2 ミュンヘンの作家への分布法則の当てはめ

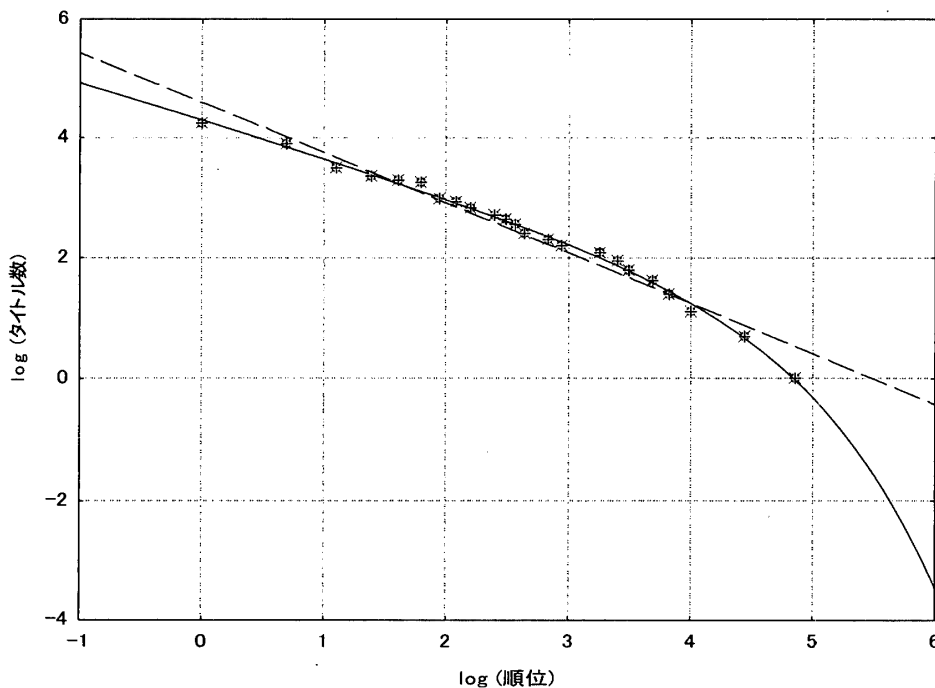


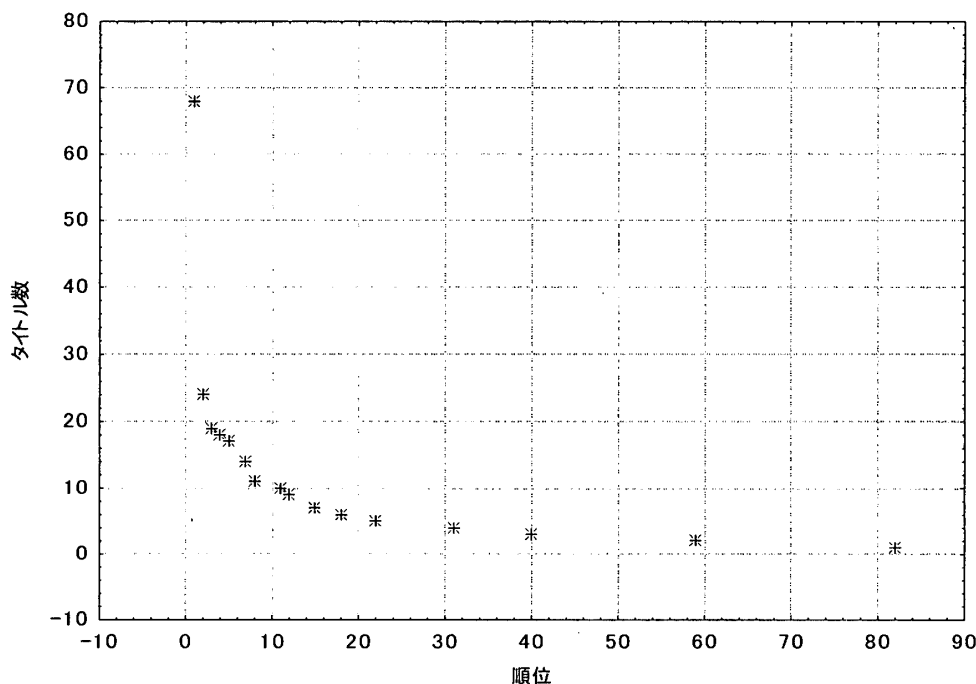


図2はタイトル数と順位をそれぞれ対数で取ったグラフである。破線はZipfの法則によるモデル(1-4)を、実線はYuleの法則によるモデル(2-4)を表している。分布は直線に近いが、緩やかなカーブを描き、右端でZipfの法則の直線(破線)よりもはっきりと下方にズレている。Yuleの法則の曲線(実線)の方がより分布に合致しているのが分る。これが、数値の上での $R^2$ 、 $R^{*2}$ の値の差になっていると考えられる。そこで、Zipfの法則による予測とYuleの法則による予測との違いが本当に有意なものかどうか確認するため、Martindale(1995)に倣ってMeng, Rosenthal and Rubin (1992)による検定を行ってみた<sup>8)</sup>。結果は、順位を用いたデータにつ

表2：ハンブルクの作家のVLB (1996年) 記載タイトル数 (上位順)

順位	点数	作家	順位	点数	作家	順位	点数	作家
1	68	Lenz,Siegfried		3	Amme,Achim		1	Schwarz,Maria G
2	24	Surminski,Arno		3	Plaichinger,Thomas		1	Schulz, Frank
3	19	Peters,Evelyn		3	Merian,Svende		1	Gaedtke,Helmut
4	18	Bredow,Ilse von		3	Vesper,Elke		1	Gebert,Anke
5	17	Nyary,Josef		3	Hahn,Kurt		1	Fröhling,Ulla
	17	Gercke,Doris		3	Grobecker,Kurt		1	Franz,Cornelia
7	14	Kronauer,Brigitte		3	Ahrens,Jutta		1	Altan,Steffi von
8	11	Klugmann,Norbert		3	Drescher,Anny		1	Glaser,Peter
	11	Blobel,Brigitte		3	Kalle		1	Häuser,Alexander
	11	Biermann,Wolf	59	2	Manikowsky,Cornelia		1	Hartlaub,Geno
11	10	Rühmkorf,Peter		2	Wohlgemuth,Hildegard		1	Grömmmer,Helmut
12	9	Hahn,Ulla		2	Pilch,Hannelore		1	Goldbeck,Manfred
	9	Bärthel,Hermann		2	Becker,Rolf		1	Frei, Frederike
	9	Tawada,Yoko		2	Schwanitz,Dietrich		1	Balsiger,Peter
15	7	Ranke,Eckart		2	Wieben,Wilhelm		1	Beuse,Stefan
	7	Waalke,Otto		2	Göhre, Frank		1	Arnold,Eva M
	7	Scheibner,Hans		2	Reemtsma,Jan Ph		1	Altschwager,Gerda
18	6	Ahrens,Hanna		2	Giordano,Rocco		1	Ankowitsch,Christian
	6	Politycki,Matthias		2	Müller,Edzard		1	Cöster,Oskar
	6	Kersten,Paul		2	Ney,Norbert		1	Duve,Karen
	6	Sölle,Dorothee		2	Nickel,Jost		1	Fleck,Dirk C
22	5	Fuchs,Gerd		2	Klähn,Wolfgang		1	Dubbe,Daniel
	5	Venske,Regula		2	Bonne,Mirko		1	Dieckmann,Dorothea
	5	Gerlach,Gunter		2	Chevallier,Sonja		1	Doutine,Heike
	5	Seyppel,Joachim		2	Eppendorfer,Hans		1	Höcker,Katharina
	5	Schröder,Bernd		2	Siebenschön,Leona		1	Nolte,Annette
	5	Holst,Evelyn		2	Blume-Werry,Ferdinand		1	Parnass,Peggy
	5	Haak,Rainer		2	Timm,Dennis		1	Mutzenbecher,G. U
	5	Harte,Günter		2	Wickert,Ulrich		1	Luhrs,Manfred
	5	Feyrer,Gundi		2	Förster,Marta		1	Möhring,Hilde
31	4	Bick,Martina		2	Stache-Peper,Eicke		1	Petschull,Jürgen
	4	Lassahn,Bernhard		2	Eilers,Reimer		1	Raben,Hans J
	4	Weiser,Hildegard	82	1	Rowohlt,Harry		1	Ranjbar-Irani,Nassrin
	4	Jantzen,Eva		1	Schaller,Heidrun		1	Proll,Thorwald
	4	Reiche,Dietlof		1	Scheel,Cordula		1	Pietrzik,Angela
	4	Schacht,Ulrich		1	Vries,Katja de		1	Praesent,Angela
	4	Raddatz,Fritz J		1	Winter,Georg		1	Keil, Frank
	4	Schuhmann,Meno		1	Werner,Ruth		1	Korn,Carmen
	4	Piwitt,Hermann P		1	Stobbe,Birgit		1	Hunger,Roland
40	3	Bieber,Horst		1	Schwedhelm,Joachim		1	Conradi,Peter
	3	Koehne,Heide		1	Strachwitz,Maja M		1	Huber,Toni
	3	Seemann,Ilse		1	Thommes,Susanne		1	Kreis,Gabriele
	3	Hensel,Ilse		1	Wegner,Matthias		1	Linsen,Albrecht
	3	Spiekermann,Gerd		1	Strohschein,Barbara		1	Lück,Günter
	3	Söhler,Karl H		1	Schütt,Peter		1	Lichtenfeld,Herbert
	3	Fricke,Friedrich		1	Schmidt-Decker,Petra		1	Kurbjuweit,Dirk
	3	Witt,Walter		1	Schmeda,Astrid		1	Latendorf,Ute
	3	Baas,Balduin		1	Ueckert,Charlotte			
	3	Panzer,Thomas E		1	Tschiche,Peter			

図3 ハンブルクの作家



いては  $z = -4.736$ ,  $p < 0.0001$ , 累積人数を用いたデータについても  $z = -3.979$ ,  $p < 0.0001$  となった。これにより、実際にそこには有意な差があることが確認できた。グラフや数値に表れた通り、Yuleの法則によるモデルの方がより説明力が高いモデルだったのである。

#### ②ハンブルクの作家の場合

以上のように、ミュンヘンの作家では、Martindale (1995) の場合と極めて似た結果になった。

では、ハンブルクの作家についてはどうか。

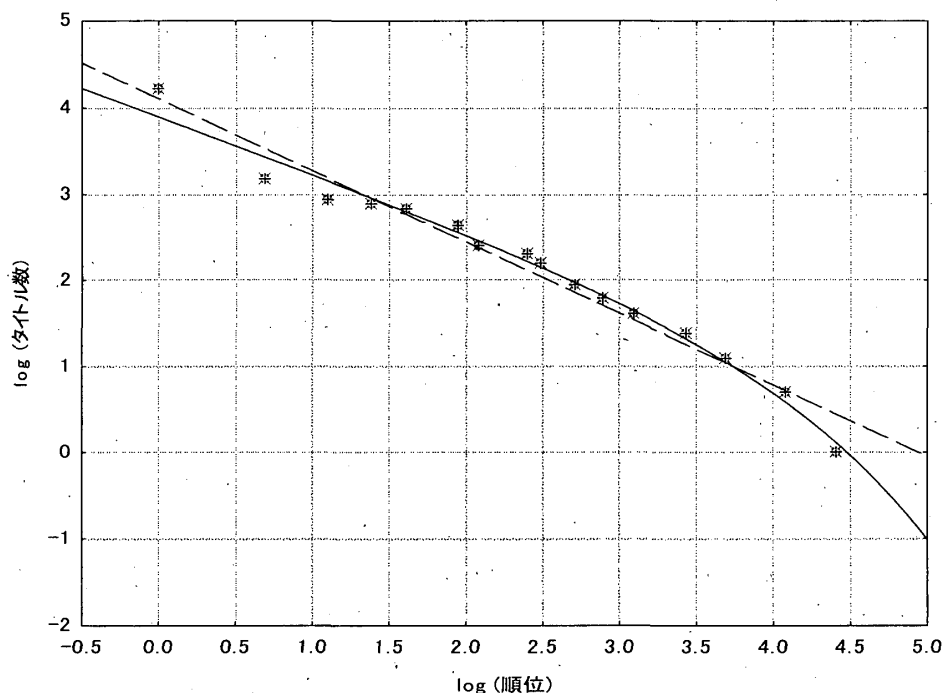
まず、ミュンヘンの作家の場合と同様にデータに用いた作家とその作品タイトル数との関係を表にして示しておく(表2)。こちらでは最もタイトル数が多かったのは現代のドイツ文学の代表者の一人として国際的にも名高い Siegfried Lenz (68点) であり、次にプロイセン地方での歴史をそこに生きる個人の観点から描いて支持されている Arno Surminski (24点)、恋愛や女性の生き方を巧みな語りで描いて人気の Evelyn Peters (19点) などが続く。世界的に知名度が高い作家としては、トップの Lenz のほかに Wolf Biermann (11点) が8位に入っている。

このデータをもとに作家の順位とタイトル数との関係をグラフに取ると、図3のようになる。やはり、逆べき型の分布が現れているのが分る。

さて、回帰分析についてであるが、ハンブルクの作家の場合には順位×タイトル関係は16ケースである。これらについて、ミュンヘンの場合と同様に二つの計量書誌学の法則を当てはめてみた。

Zipfの法則については、順位をもとにした分布に当てはめた場合が下の1-6の式、累積人数を

図4 ハンブルクの作家への分布法則の当てはめ



もとにした分布にあてはめた場合が1-7の式ようになった。

$$1-6 \quad \log F = 4.106 - 0.831 \cdot \log R$$

$$1-7 \quad \log F = 4.029 - 0.747 \cdot \log S$$

F検定の結果と決定係数および調整済決定係数は、1-6で $F(1,14)=414.001$ ,  $P<0.0001$ ,  $R^2=0.967$ ,  $R^{*2}=0.965$ , 1-7で $F(1,14)=526.263$ ,  $P<0.001$ ,  $R^2=0.974$ ,  $R^{*2}=0.972$ となり、ミュンヘンの作家についてのZipfの法則の当てはめと同様に、どちらも極めて良い結果になった。ただし、数値を累積人数に置き換えたときの方がやや良い値になった。

Yuleの法則に当てはめた場合には次のようになる。

$$2-6 \quad \log F = 3.908 - 0.654 \cdot \log R - 0.011 \cdot \exp(\log R)$$

$$2-7 \quad \log F = 3.891 - 0.642 \cdot \log S - 0.005 \cdot \exp(\log S)$$

Yuleの法則の場合のF検定の結果と決定係数および調整済決定係数は、2-6で $F(2,13)=379.146$ ,  $P<0.001$ ,  $R^2=0.983$ ,  $R^{*2}=0.981$ , 2-7で $F(2,13)=379.370$ ,  $P<0.001$ ,  $R^2=0.983$ ,  $R^{*2}=0.981$ , となり、どちらも同等程度の極めて良いモデルとの一致を示す値がでた。

Zipfの法則のモデルとYuleの法則のモデルの比較では、ハンブルクの作家の場合でも、Zipfの法則と比べ、Yuleの法則の場合の方が、 $R^2$ 、 $R^{*2}$ の値は若干高く、数値の上では幾分良い値となっている。

ミュンヘンの作家の場合と同じように、分布に両モデルを当てはめたグラフを作ってみると、図4のようになる。破線はZipfの法則によるモデルの式(1-6)を、実線はYuleの法則によるモデルの式(2-6)を表している。

Siegfried Lenz (順位=1, タイトル数=69 /  $\log(\text{順位})=0$ ,  $\log(\text{タイトル数})=4.220$ ) がやや飛び抜けているため、分布はミュンヘンの場合よりも若干不規則になっているが、ほぼ同じ形を取っている。したがって、同じようにYuleの法則の方が分布の説明に適しているように見える。ただし、実際にMeng, Rosenthal and Rubin (1992) による検定を行ってみると、順位によるデータでは $z=-1.624$ ,  $p=0.104$ , 累積人数によるデータでも $z=-1.241$ ,  $p=0.215$ となり、二つのモデルの間には有意な差は認められなかった。したがって、Martindale (1995) の調査と同じようにZipfによる法則のモデルもYuleの法則によるモデルも極めてよく分布を説明していることは分かったが、両者の比較という点に関しては、ハンブルクの作家の場合では、明確な判断を下すことはできなかった。

以上、ミュンヘンの作家とハンブルクの作家について回帰分析を用いて分布の法則性を確かめてみた。ハンブルクの例ではZipfの法則とYuleの法則の比較はうまくいかなかったが、分布の型やミュンヘンの作家に関する分析などから、おおむねの所では、結果はMartindale (1995) の論文数による調査と同じであったと言える。

また、順位の他に累積人数を用いた調査も行ったが、累積人数で分布を調べると特にZipfの法則において誤差が少なくなることも分かった。このことは、Zipfの法則との違いになっている、Yuleの法則の数式(2-3)の三つ目の「 $+C \cdot \exp(\log R)$ 」の項の意味を考える上でも興味深い。というのも、累積人数で回帰分析を行った場合にはこの項の係数Cの値はミュンヘン、ハンブルクどちらの場合においても、半分程度に小さくなっている(0.010ないし0.011が0.005へ変化)。つまり、この項の影響は累積人数の分布で調べた場合の方がより低く見積もられているのである。

そこで、次のような推測が成り立つ。

順位は累積人数とほとんど同じ意味を持つ。しかし、順位においては、同一順位を取る際に一番少ない数で表現するのが習慣であるため、そこに人為的な操作が混じりこんでしまう。それが三つ目の項による補正を必要とする理由の一つになっているのではないか。

ただ、それだけの理由でないのも明らかである。実際、Meng, Rosenthal and Rubin (1992) の検定では、ハンブルクの作家の場合にこそ有意な差は認められなかったが、ミュンヘンの作家の場合には、累積人数のデータにおいても、はっきりとした有意差が現れていたからである。この点はグラフでみると、もっと分かりやすい。次の図5、図6は累積人数による分布を調べた場合のグラフであるが、検定の上では良い結果が出なかったハンブルクの作家についても、やは

り、直線というよりは曲線を予測させる分布になっていることが見て取れる。と言うのも、どちらの表においても、順位でいうと下位に当たる右端の集団の部分で、同様に分布が下方に湾曲しているからである。これは何らかの法則性を予感させる湾曲である。

この点については次のように推測することができる。そもそも、この右端に現れる分布の集団は、タイトル数で言うと1ないし2の注目度の低い集団である。そこには当然、新人作家も多

図5 ミュンヘンの作家への分布法則の当てはめ(累計人数による分布の場合)

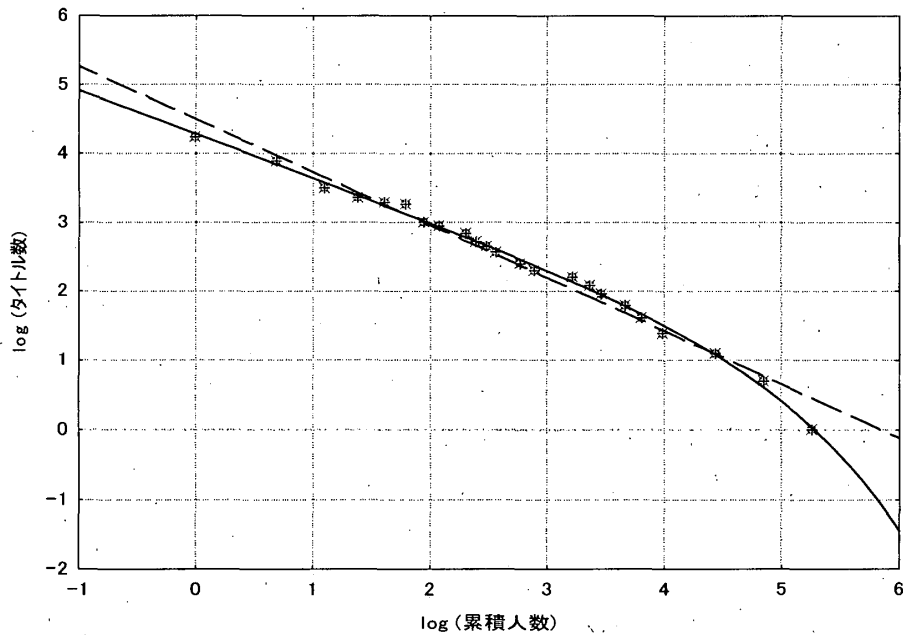
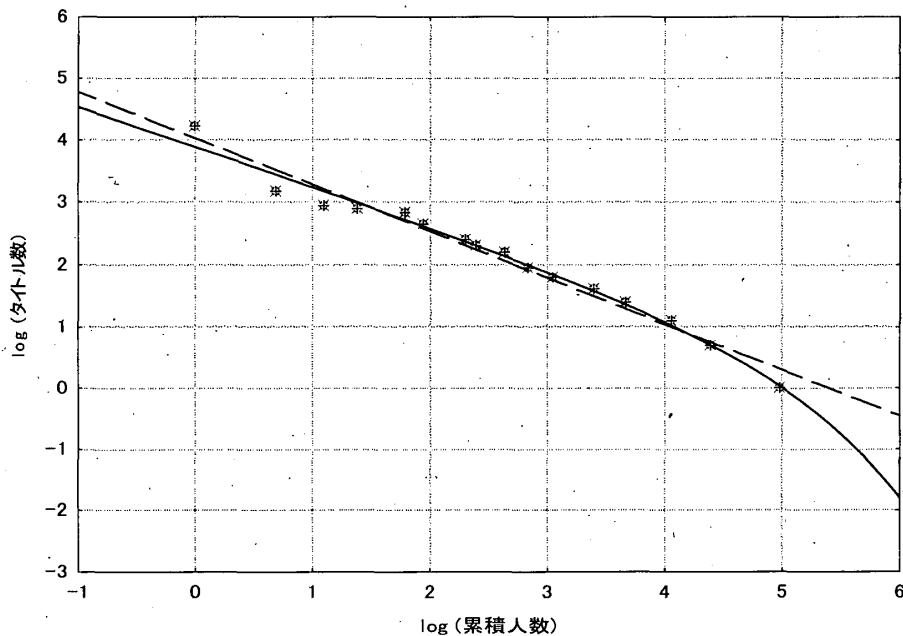


図6 ハンブルクの作家への分布法則の当てはめ(累計人数による分布の場合)



く含まれる。すでに社会的に認知された作家と比べ、新人作家の場合には作品を世に送ることすら難しく、また、デビューした後も安定した創作活動にすぐに入れるとは限らない。文学的評価の裏づけがないからである。出版社にとって新人の作品の出版はすでに読者が付いている作家と比べリスクが高くなる。原稿を受け取る作家の数は絞り込むだろう。知名度のある作家のように当然のように原稿を印刷に回すわけにはいかないからである。そうした事情の差が、タイトル数1ないし2の作家の人数を制限し、Zipfの法則で予測するよりも左側に分布をズレさせているということが考えられる。つまり、アクチュアリティの他にブレイク・スルーのような別の要因が介在している可能性があるのである。Martindale (1995) は詳しく検討していないが、研究論文の場合でも同じことが考えられる。つまり、研究対象としてのブレイク・スルーの壁が扱う作家の数を制限している可能性があるのである。いずれにしろ、この点についてはより詳しく検討してみる必要があるだろう。

以上、見てきたように、タイトル数においても Martindale が調べた論文数の分布と同じような法則性を持った分布が得られることが確認できた。また、ミュンヘンの調査の結果や注目度の低い集団での分布のズレなどを考えると、ハンブルクの作家の場合では数値としては良い結果が出なかったが、やはり、Yuleの法則の方がモデルとしてより適していると推測できる。検討すべき課題は残るが、これも Martindale の結果と似た結果だと言える。一方、たとえ Yule の法則がより良く当てはまるにしろ、Zipfの法則によるモデルとは本質的に大きく異なるものではないことも事実である。ミュンヘンの作家の分析でもハンブルクの作家の分析でも、順位で調べた場合でも累積人数で調べた場合でも、当てはめた数式2-3における係数Cの値は0.005~0.011と、極めて小さい数値になっており、大まかに見ると Yule の法則によってつけ加えられた三つ目の項(数式2-1における「 $\cdot C^R$ 」、2-3における「 $+C \cdot \exp(\log R)$ 」)はそれほど影響が大きいものではないからである(だからと言って軽んじて良いという意味でもないのだが)。また、その影響は、数式上、特にタイトル数の少ない作家の領域において顕著に現れる仕組みになっている。例えば、ミュンヘンの作家で順位の分布をとった場合などは、 $\exp(\log(\text{順位}129)) = 1.29$ で最大となる。もちろん、この値は無視できるものではない。しかし、Zipfの法則に対して Yule の法則によって加算された項の役割は言わば部分的で、限定されたものであるのは確かである。原則的にはタイトル数の分布は Zipf の法則の数式1-1の  $a/R^b$  の項で表される原理に従っていると解釈できる。つまり、文学シーンの中心においては注目を集めている少数の作家が存在し、そこから周縁に向かってゆけばゆくほど、注目度はその範囲の拡大と累乗の関係で減ってゆく仕組みになっていると捉えて、ほぼ間違いないのである。コアへの集中と周縁への分散による構造<sup>9)</sup>。例えて言うなら、宇宙に浮かぶ星雲のような厚みと拡散を持った構造を文学シーンは持っていると言うことができる。

### 3. 考察：構造からプロセスへ

さて、以上のように、この調査からは、出版タイトル数を手がかりとしたアクチュアリティの調査からも、文学研究の集中から名声の分布について調べた Martindale (1995) の場合と極めて似た結果が得られることが分った。また、その結果から、文学シーンの構造は、安定し、注目を浴びる作家のグループから、注目度が低い、ないし、単発的な、言わばゆらぎをはらむ活動の作家へと広がるコア／周縁関係を作って成立していることも考察できた。しかし、それにしても、そこに作用している分布の法則はあまりにもシステマティックである。では、なぜ累乗の関係なのか。その法則で表わされているのは一体どのような作用なのだろうか。

まず、断っておかなければならないが、ここで見られた分布について、具体的にそのメカニズムがどうなっているのか特定することはここではできない。原理が不確かだからではない。そこにはあまりに多くの要因が関わっているからである。単純な数式にモデル化されたとしても、一つ一つの係数の背後にはさまざまな事象の影響が考えられる。例えば、今回のデータの中には大衆的ないし娯楽産業的な傾向が強いものも芸術性や社会性への志向が強いものも、新人の作家も大家となった作家も全て一緒に含まれている。そういった要因の全てがどのような影響関係にあるか分析するのは容易ではない。

ここでは原理的な問題に話題を限定することで考察を進めたい。

これまでの所、逆べき型の多くの分布の原理については、よく指摘されている成功の累積の原理（成功が成功を呼ぶ原理）を始め、もともとの Zipf の解釈である最小努力の法則 (Zipf)、あるいは付和雷同の原理（小野田）など、説明や数学的解釈は色々となされている<sup>10)</sup>。しかし、少なくとも、これが頻度の高いものにますます期待が集中するというような（だからこそ、最小努力や付和雷同という説明も成立するのだが）累積的なメカニズムを背後に持つ現象であることはおおむね共通の理解となっている。したがって、ここから、ここで見られた分布について主だった原理を推測することができる。

最初に思いつくことは条件の累積である。まず単純に考えて見よう。複数の作品が文学シーンに出回るためには作品が一つ出版された上に (!) 次の作品が出版されなければならない。その際、出版のための条件は単に加算されるのではなく、掛け合わされてゆくことになる。シーンに出回る作品の数が多くなればなるほど、条件は掛け合わされ、それが可能な作家の数は少なくなる計算になる。条件の累積化が起こるのである。しかし、話は実際にはそう単純でない。と言うのも、ここで扱ったのは作家ごとの出版タイトルの総数ではなく、ある時点で入手可能となっている数だからである。実際には、作家としての地位が確立すると逆に定期的に出版されるのが通例で、そうなると問題はどれだけ過去に刊行されたタイトルがシーンに残り続けているかに——出版時の部数がどの程度の規模か、評判を博し続けるか、再版があるか、絶版になるか、そのスピードはどうかといったことに——移ってくる。したがって、むしろ、問題はシーンに残る可能性の掛け合わせの方なのである。これについては読者の側から発想した方が分かりやすい。つまり、同じ作者の別の作品を連続して読むというような反復的な受容傾向を読者が示せば示すほど、

それだけその作者について複数のタイトルが書店などに並ぶことになる。ただし、そうした読者からの支持も作家がシーンに自らの存在感を示し続けることによってしか達成できない。新しいタイトルを出し続け、その都度評価にさらされ、読まれたり読まれなかったりする、そういったプロセスを何度も経ることによってしかアクチュアリティは示せないのである。結局、個々のタイトルがシーンに受け入れられ続けるという条件が掛け合わされて初めて複数のタイトルが書店に並ぶことになる。出版のみならずこうした受容の条件の累積も指数関数状の分布の背景にあると考えられるのである。

しかし、そこにはさらにその累積作用を歪めるもうひとつの要因も考えられる。計量書誌学でよく言われている成功が成功を呼び込むといった効果の累積プロセスの存在である。つまり、一度出版して肯定的な評価が与えられた作家ほど、次の作品は出版されやすくなる。読者の注目も集まりやすくなる。そして、注目が集まれば集まるほど、また、新たな読者の注目も呼び覚ます。他の作家に流れていた読者の関心も引きよせるようになる。作家は自信を持って作品を生み出せるようになるかも知れない。編集者や他の作家仲間などとの新たな交流も生まれ、そこから刺激や力を得られるだろう。出版社は次の作品では何らかのキャンペーンを組むかも知れない。書店でも読者の反応を期待して書籍の展示を工夫するかも知れない。こうしたフィードバックが幾重にも働き、創作や出版、流通や需要に影響を与える。これによって、少数の極端に著名な作家と数多くのあまり知られていない作家との歪んだ差異が生まれる。フィードバックにより還元される効果が累積され、それによって分布の歪みが生まれていると考えられるのである。

おそらく、実際にはこの双方が同時に——しかも、重複しあって——働いていると推測される。詳しい考察は事象の複雑さからして容易ではない。しかし、原理的な考察をさらに進めるため、ここでは社会システム論に依拠することで、このことをさらに理論的な観点から捉えなおしてみたい。

まず、社会システムとしての文学の捉え方であるが、これは次のようにまとめることができる<sup>11)</sup>。

- ① 文学は、創作、出版、受容、批評等の諸活動によって織り成されるコミュニケーション・システムである。そこでは、それぞれの諸活動が次々に連鎖しあい、それによって文学は活動の連鎖を通してまた新たな活動を生む。文学は自己創出的な社会システムになっているのである。
- ② 作家というコミュニケーション・チャンネルはこのシステムの中の区分可能なサブ・システムに当たる。つまり、それぞれの作家への期待（これがサブ・システムのコードとなる）をめぐり、一つ一つの作品が出版され読まれるコミュニケーションの連鎖のまとまりが成立していると捉えられる。そのまとまりが上手く適したニッチ（生存環境）に出会い、その環境内にある文学的・個人的・社会的な関心、経済的な関心等を取り込むことができたなら、そのサブ・システムはシステムとしての運動をさらに安定化させ、拡大化させてゆくことができる。確実に活動と活動とが連鎖しあうようになり、持続可能、発展可能な社会現象となってゆくのである。
- ③ システム全体についても、サブ・システムについても、基本は活動を通じての自らの活動の



(再)生成 (= 自己組織性) である。作家から読者へ、読者から作家や出版社へ、そしてまた作家から読者へと、様々なフィードバックに支えられ、活動は連鎖する。個々の活動は繰り返され、その都度、背景となる環境から刺激やエネルギーを取り込み、運動体としてのシステムを組み立て直す。こうした再帰的な活動の連鎖によって自己組織的な現象としての文学は成り立っているのである。

この立場から考えて見ると、条件や効果の累積は何に根ざしたものかが見えてくる。つまり、これはプロセス (連鎖) の持続を存続の原理とするシステムの基本構造が生み出す現象なのだ。つまり、再帰性という運動原則——これが現象的には複数のタイトルの累積に結びつくのだが——によって不可避免的に生み出されている現象なのである。

名声は歪むべくして歪む。条件や効果の累積はシステムの再帰性の反映だからである。したがって、これは文学的な価値そのものの問題というよりは、むしろ社会的な (= 社会システムとしての) 問題だとも言える。しかし、その社会的な回路なしには、そもそも文学は共通の体験素材にはなり得ない。そして、いったん、その回路を通してしまえば、(本来、個々人が直接的に体験し評価できる筈の) 個々の作家の価値は、個人の手を離れた次元に移る。プロセスの篩にかけられ、記憶か忘却かの運命に分けられる。文学の価値は社会的に加工され、歪められるのである。しかし、社会的な加工物であるからこそ、その歪んだ期待が社会的な力を持っているのも事実である。それはシーンを支配し、持続可能なコミュニケーション・システムを作り上げる。それもまた、文学の文化的な仕掛けを考える上では重要な側面なのだ。問題があるとすれば、それはむしろ、われわれの側の混同にある。われわれは作品や作家の価値の次元とこうした名声形成の錬金術が働く次元とをしばしば混同する。著名性ないし傑作性を作家や作品の属性であるかのように捉えてしまう。その両者を峻別することは研究や教育という領域においてすら難しい。Martindale (1995) は自らの論文数の分布の分析結果から、こう指摘している。シェイクスピアのような一部の作家のみに注目が集まり、逆にこれまで活躍していた女性作家たちが簡単に歴史の中に忘れ去られてきた。文学的価値という観点から見れば、それは間違いなのではないのか、と<sup>12)</sup>。名声と文学の価値とを等号で結んではいけない。質をめぐる幻想から解放されていなくてはならない。それは歪みの中の一部の突出した存在しか見えなくする。そこには、文学活動が持つ多様性を、そして、名声形成のメカニズムと多様性とをともに持つ文学活動の全体像を見誤らせる危険が潜んでいる。

さて、一方、以上のような原理的な考察から、文学シーンの構造を分析する際の理論的な課題も見えてくる。もちろん、すでに述べたように理論的には原理的側面の考察以上のものをここから引き出すのは困難である。しかし、逆に、ここで確かめられた事実から、どういうアプローチに限界があるかは明確に指摘できる。つまり、ここでの分析結果からは構造主義的なアプローチの持つある種の死角が浮かび上がってくるのである。

今日、ブルデューの構造主義的なシーン (= 場 (field)) の理論は文学を始めとする社会学的な文化現象の調査にとって最も重要な理論の一つとなっている。しかし、その理論では、名声と

はむしろシーンの差異構造に根ざしたものと捉えられることになる。つまり、作家どうしの間では文学的地位をめぐるいわゆる象徴闘争が暗黙の内に繰り広げられており、彼らが相互に相手に対する差異を掲げ、自らの正統性を主張しあう中でシーンの構造が生み出される。この闘争の中で定着する作家間の差異関係こそが、行為者間の活動上の関係よりも根本的な関係（＝客観的な関係（objective relation））であり、それこそが事実上のシーンの構造となっていると捉えられるのである<sup>13)</sup>。しかし、今回示したような分布現象についてはこうした差異＝構造論の理論では不十分なものは明らかである。分布に現れた関係は単純な差異関係ではない。そこでの関係は累積的なプロセスに影響された、機械的に歪められた関係だからである。

問題は、ブルデュー流の差異＝構造論が分配された不平等の構造に光を当てようとするあまり、差異構造を根本的な関係として強調しすぎている点にある<sup>14)</sup>。そこには物神化／実体化の危険さえ潜む。しかし、実際には、差異関係の背後には、常に不平等を不平等なものとして分配している分配のメカニズムがある。それが名声の歪んだ関係を生み出しているのである。そもそも、歪みのない名声、歪みのない文化的権威などというものがあるのだろうか？実際にそんなものなどないことは日常生活においてもすでにわれわれは気づいている筈である。関係は真空状態の中では生まれない。あくまでプロセスという社会的なメカニズムを通してしか生まれない。そして、そしてそれが生みだされる時には、名声の関係は歪んだものとして生み出されてしまうのである。

さて、名執（2002）で私はブルデューのアプローチが実は進化理論の側面を考慮することでシステム論の観点と十分に重なることを論じてみた<sup>15)</sup>。しかし、以上から、ここでは、さらに、システムという観点が構造分析の弱点を補う可能性を持っていることを強調しておきたい。シーンの構造を単なる差異構造としてではなく、構造の形成を導くシステムの仕組みの問題として一段深い観点から眺め直すことを可能にするからである。もちろん、こう指摘するからといって、作られた構造の持つ意味を軽んじようとしているのでもない。構造とプロセスは結局のところ互いに互いを条件付けあって存在しているものだからである。ここで指摘しておきたかったのは構造論だけでは不十分だという点である。歪んだ関係の背後にあるメカニズムを認識させるには、プロセスの理論が必要なのである。

## 註

- 1) Diodato (1994), Martindale (1995), White and McCain (1989), 海野(1994), 小野田(1979), 影浦(2002)を参照。
- 2) Martindale (1995) を参照。
- 3) Rees (1984) を参照。Rees は、文学作品のカノン化は、1) 書評などのジャーナリスティックな批評を受ける段階、2) まったくエッセイ的な批評を受ける段階、そして、最後に3) 学術的な批評を受ける段階の3つの段階を経て進むと論じている。

- 4) フーコー (1990) を参照。
- 5) 主に利用したサイトは, Deutsche Bibliothek Frankfurt am Main (dbf-opac.ddb.de/), Deutsche Bücherei Leipzig (dbl-opac.ddb.de/), Amazon.de (amazon.de), ZVAB: Zentrales Verzeichnis Antiquarischer Bücher (zvab.com) である。
- 6) Zipf (1972) は当初, テキスト中における語彙頻度  $f$  と順位  $r$  との関係が,  $f = k/r$  ( $k$  は定数) となるとした。これを補正し, 一般化したものが,  $f = k/r^\alpha$  である ( $\alpha$  は 1 に近い数とされる)。
- 7) Martindale (1995) は全作家のデータで分析しているが, これは間違いである。全作家のデータを用いると, たとえ線形モデルを用いても分布の説明ができてしまう。スロープがなだらかな下位の部分に多くの作家が集中し, 上位の突出した作家の方は数が少ないため無視しても計算上問題がないからである。また, 同一順位のデータを無数に含んでいるため, 検定結果は不自然なほど良い値になってしまう。ここでの目的はランク×サイズ関係の法則性を確かめることである。各ランク一つずつに対するサイズのデータとして分析を行わないと信頼できるモデルの検討はできないのである。
- 8) Meng, Rosenthal and Rubin (1992) の検定は観測値と予測値のそれぞれの相関係数の違いが有意なものかどうか確かめるものである。この調査では Hahn und Stöder (1999) の Java スクリプトによるプログラムを用いた。
- 9) 文学シーンの構造については, Gerhards und Anheier (1987) ないし Gerhards and Anheier (1991) が作家の相互交流の分析から, Nooy (2002) が文芸雑誌のネットワーク分析からコア/周縁関係となっていることを指摘している。また, 海野は逆べき型の分布について「少数者への集中, 多数者への分散」(海野1994, 27) という言い方で特徴づけている。
- 10) 海野 (1994) を参照。
- 11) Luhmann (1987), Luhmann (1995), Luhmann (1998), Schmidt (1989) を参照。
- 12) Martindale 1995, 232。
- 13) Bourdieu (1993), ブルデュー (1995/1996) を参照。
- 14) ブルデューは相互行為論やシステム論の観点に対し否定的で, それらとの類似点よりも差異を常に強調してきた。直接的な行為者の交渉よりもその背後にある力関係を社会における「客観的關係」と捉えるからである。例えば, Bourdieu (1989), Bourdieu and Wacquant (1992), Bourdieu, Rees, Schmidt and Verdaasdonk (1989) を参照。これに対しては, 近年, Nooy (2003) もネットワーク分析の観点からブルデューの理論を再検討し, 構造の背後にある直接的な相互交渉を視野に納める必要性を論じている。
- 15) ブルデューの言う差異や闘争の理論は, 事実上, 具体的環境でのコミュニケーション・システムのヴァリエーションやセレクションという進化理論と同じ説明課題を追っていると解釈できる (ヴァリエーションないし差異とは作家というサブ・システム独自のコードのことであり, セレクションないし闘争とは特定の環境の中での適応/持続のことだ)。経験的調査の展望や歴史性の欠如という点では当時の Bourdieu (1989), Bourdieu, Rees, Schmidt and Verdaasdonk (1989) でのシステム論への批判は的を得たものであるが, 両者の理論的な課題認識は実はブルデューが強調しているほど違うものではない。この点については名執 (2002) で詳しく論じている。

## 参考文献

- Bourdieu, P., 1989. Questions of method, on: Ibsch, E., D. Schram and G. Steen. (Ed.), 1991. *Empirical studies of literature: Proceedings of the Second IGEL-Conference*, Amsterdam 1989. Amsterdam: Editions Rodopi. 19-36.
- Bourdieu, P., 1993. *The Field of Cultural Production*. New York: Columbia University Press.
- Bourdieu, P., K. van Rees, S. J. Schmidt and H. Verdaasdonk. 1989. The structure of the literary field and the homogeneity of cultural choices, in: Ibsch, E., D. Schram and G. Steen. (Ed.), 1991. *Empirical studies of literature: Proceedings of the Second IGEL-Conference*, Amsterdam 1989. Amsterdam: Editions Rodopi. 427-443.
- Bourdieu, P. and L. J. D. Wacquant., 1992. *An invitation to reflexive sociology*. Chicago: The University Chicago Press.
- Diodato, V., 1994. *Dictionary of Bibliometrics*. New York/London/Norwood: The Haworth Press.
- Gerhards, J. und H. K. Anheier, 1987. Zur Sozialposition und Netzwerkstruktur von Schriftstellern, in: *Zeitschrift für Soziologie*, Jg.16, 385-397.
- Gerhards, J. and H. K. Anheier, 1991. Literary Myths and Social Structure, in: *Social Forces*, 69(3), 811-830.
- Hahn, A. und J. Stöber, 1999. Signifikanztest für zwei korrelierte Korrelationen, in: [userpage.fu-berlin.de/~ahahn/sigcorr.html](http://userpage.fu-berlin.de/~ahahn/sigcorr.html).
- Kürschners Deutsches Literatur-Kalender*, 61.Jg.,1998, München/Leipzig: Saur.
- Luhmann, N., 1987. *Soziale Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt a. M. (邦訳: N. ルーマン (佐藤勉監訳)『社会システム論 (上/下)』 恒星社厚生閣, 1993/1995).
- Luhmann, N., 1995. *Die Kunst der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: suhrkamp.
- Luhmann, N., 1998. *Die Gesellschaft der Gesellschaft I/II*. Frankfurt am Main: suhrkamp.
- Martindale, C., 1995. Fame more fickle than fortune: On the distribution of literary eminence, in: *POETICS*, 23, 219-234.
- Meng, X.-L., R. Rosenthal and D. B. Rubin, 1992. Comparing correlated correlation coefficients, in: *Psychological Bulletin*, 111, 172-175.
- Nooy, W. de, 2002. The dynamics of artistic prestige, in: *POETICS*, 30, 147-168.
- Nooy, W. de, 2003. Fields and networks: correspondence analysis and social network analysis in the framework of field theory, in: *POETICS*, 31, 305-328.
- Rees, C. J. van, 1984. Wie aus einem literarischen Werk ein Meisterwerk wird. Über die dreifache Selektion der Literaturkritik, in: P. Finke und S. J. Schmidt (Hg.), *Analytische Literaturwissenschaft*, Braunschweig/Wiesbaden: Vieweg, 175-222.
- Schmidt, S. J., 1989. *Die Selbstorganisation des Sozialsystems Literatur*. Frankfurt am Main: suhrkamp.
- Verzeichnis lieferbarer Bücher 1996* (CD-ROM. Stand: Sept.1996), Frankfurt am Main: Verlag Buchhändler-Vereinigung.
- White, H.D. and K. W. McCain, 1989. Bibliometrics, in: *Annual Review of Information Science and Technology*, vol.24, 119-186.

名声の歪んだ関係 — 文学的アクチュアリティの分布とそのシステム論的考察：『ドイツ出版図書目録 (VLB)』のデータをもとに—

Zipf, G.K., 1972. *Human behavior and the principle of least effort*. New York: Hafner.

M. フーコー (清水徹訳) 「作者とは何か?」, M. フーコー 『作者とは何か?』 哲学書房, 1990年, 9-72.

P. ブルデュー (石井洋二郎訳) 『芸術の規則 I / II』 藤原書店, 1995年/1996年

海野敏 「計量情報学の分布法則—数学的モデルの構築—」, 日本図書館学会研究委員会編 『図書館情報学における数学的方法』 日外アソシエーツ, 1994年, 16-54.

小野田夏生 「“Bibliostatistic” — 情報現象の統計学的説明 —」, 『情報管理』, vol/21. No.10, 1979年, 782-802

影浦峽 『計量情報学』 丸善株式会社, 2002年.

名執基樹 「システムと構造—文学システムの経験的調査を目指して—」, 『金沢大学 独文研究室報』 17 (= 『大瀧敏夫先生退官記念論文集』), 2002年, 33-48.